

南西諸島の農業に貢献する

生産環境研究領域長 平八重 一之

九州農業試験場は、平成13年4月に九州沖縄農業研究センター（九州沖縄農研）となりました。現在の正式名称は、「国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 九州沖縄農業研究センター」です。九州沖縄農研の本所がある熊本県合志市でも、まだまだ「九州農試」が通り名となっています。今回のニュースは、「九州沖縄農研」が南西諸島の農業も研究対象としていることを広く知っていただくために、主として沖縄で展開している農業研究についての特集となっています。

南西諸島は薩南諸島（大隅諸島、トカラ列島、奄美群島）、琉球諸島（沖縄諸島、先島諸島）および大東諸島からなり、1,200km×1,000kmの中に198島（有人島約70）があります。南西諸島は亜熱帯型気候区に属し、その温暖な気象条件を活かして、サトウキビを中心にカンショやゴーヤ等の野菜、マンゴー等の熱帯果樹、キクを中心とした花きが栽培されているほか、肉牛生産も盛んで多様な農業が展開されています。しかし、南西諸島の農業は地理的・気候的条件から台風や干ばつの影響を受けやすく、土壌も痩せています。これらに貢献する九州沖縄農研の研究例として、養豚糞尿を活用したサトウキビの減化学肥料栽培、高収益を目指したアスパラガス端境期生産への取り組み、沖縄におけるソバ産地の形成、周年グラス体系を可能とする牧草品種育成を紹介しています。

また、南西諸島は、侵入・新規発生病害虫の最前線です。九州沖縄農研は沖縄県農業研究センター、鹿児島県農業開発総合センター、熊本県農業研究センターと共同戦略連携協定「南方性害虫（海外飛来性害虫、新規発生病害虫、特殊害虫）の発生予察と防除技術の開発に関する研究」を結んでいます。これを推進するため、九州沖縄農研所属の3名の研究者が沖縄県農業研究センター（糸満市）に滞在しています。植物防疫上の重要害虫であるカンショのゾウムシ類を対象に、まん延防止・根絶のための研究を発生現地において効率的に行っています。

九州沖縄農研の南西諸島に関する研究は、沖縄に限りません。九州沖縄農研には種子島にサトウキビの研究拠点があります。そこでは、精糖用や飼料用のサトウキビ品種の育成とその栽培法・利用法の開発に取り組んでいます。特に飼料用サトウキビでは、安定的に多収栽培し、食品残渣と組み合わせた混合

飼料（発酵TMR）を調製・給与する体系を開発しました。サトウキビと並ぶ南西諸島の基幹産業である肉用子牛生産の安定化に大きく貢献する技術です。

ミカンコミバエは、果実や果菜類に甚大な被害を与える重要害虫ですが、我が国

では1986年に根絶されました。しかし、そのミカンコミバエが、2015年9月以降に奄美諸島南部を中心に多数捕獲されました。まん延防止と根絶に万全を期すために、農研機構果樹研究所、九州沖縄農研および鹿児島県農業開発総合センター大島支場が協力・分担した緊急の研究課題も始まります。

南西諸島の農業では多くの不利な点がありますが、これらの困難に立ち向かうために、九州沖縄農研では2013年から「南西諸島農業研究連絡会議」を開催しています。南西諸島を舞台とした研究課題に様々な分野の知恵を結集して問題の解決を図り、広く情報を発信していくための取り組みです。

沖縄には美味しいものがたくさんありますが、“豆腐よう”と並んで“島らっきょう”の天ぷらと浅漬は晩酌に最高です。以前にもプランターで栽培したことはあるのですが、この秋には家庭菜園で展開しています。



家庭菜園の“島らっきょう”